

情報活用能力の育成を図る授業のグランドデザイン

～主体的・対話的で深い学びの実現を目指して～

大阪市立滝川小学校 研究グループ

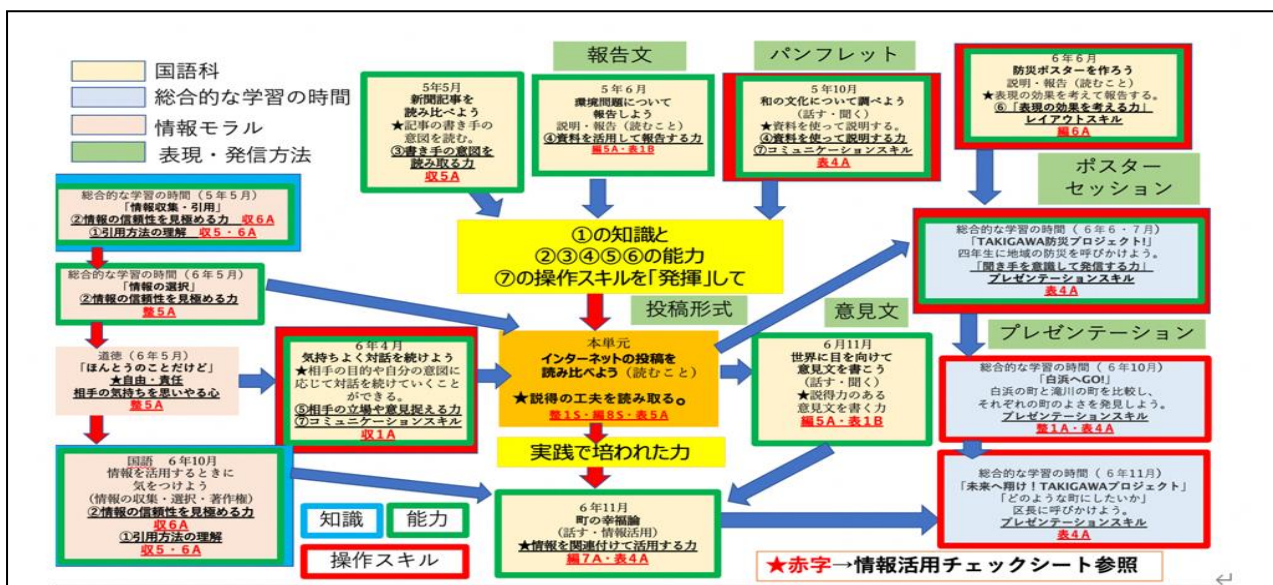
1. 研究主題設定の理由

本校は、授業の中で子ども達が学級を自分の居場所と感じることができるよう授業づくりを進め、『一人一人が大切にされる学校』を目指している。2021年2月、児童一人に1台の学習者用端末が整備され、「公正で個別最適化された学び」の実現に向けて、「情報活用能力の育成を図る授業のグランドデザイン」の研究テーマのもと、授業改善に取り組んできた。その情報活用能力の育成に向けた具体的な実践について振り返る。

2年前に学習者用端末が導入されてから、すべての学級でその活用に向けての取組みをスタートした。まず1年目は、端末を活用すること自体が目的化しないように、あくまでも「学習の基盤となる資質・能力」としての「情報活用能力」を獲得していくためのツールとして活用する授業デザインの研究を進めていくようにした。また、各学年に応じた情報教育単元一覧表を作成し、系統的に情報活用能力を育成できる体制を整えるようにした。その結果、①各教科等の特質に応じて適切な学習場面で情報活用能力の育成を図り、②育まれた情報活用能力を発揮させ、③情報活用能力を発揮させることにより、各教科等における主体的・対話的で深い学びへとつながることが見えてきた。本研究では、児童の情報活用能力の育成を図るために教科横断型の授業デザインを開発し、その有効性を検証する。

2. 研究の趣旨

本研究では、第6学年国語科「インターネットの議論を考えよう」（東京書籍）の学習活動において、児童の言動、スクールライフノートの記述、情報スキルチェック等をもとに情報活用能力の育成の視点から検証した。また、本単元で育成した情報活用能力が、国語科「防災ポスターを作ろう」（東京書籍）、総合的な学習の時間「未来へ翔け！TAKIGAWAプロジェクト～4年生に地域の防災を伝えよう～」の学習活動で発揮できたかについて、カリキュラムイメージ図を作成し、その有効性について考察した。



教科横断型の授業デザインを構築し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組んだ。そのために、カリキュラムイメージ図を作成し、身に付ける力を明示するとともに、その関連性も明らかにした。情報活用能力の獲得の場面と発揮の場面を明らかにすることで、焦点を絞った指導が実現した

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 情報活用能力の育成を図る授業デザインの構築

国語科、総合的な学習の時間を中心に教科横断型の授業デザインを構築し、協働的・体験的な学びの実現をめざした。各教科・領域の関連性をカリキュラムイメージ図に表し、情報活用能力の育成場面と発揮場面を可視化できるようにした。

視点② ICT を活用した協働的・体験的な学び

学習過程①「課題の設定」②「情報の収集」③「整理・分析」④「表現・発信」をイメージし、ICT を効果的に活用して主体的・対話的な学びを目指した。さらにこの過程を繰り返し、探求的な学びを具現化できるようにした。

視点③ スクールライフノートや情報活用スキルチェック表（滝川編）を活用した児童の身に付いた力の可視化

スクールライフノートは、授業の振り返りの場面で主に活用した。指導者は児童の記述した内容を把握し、評価するとともに授業改善に役立てることができた。

情報の収集、整理・分析、編集、表現・発信の4場面から成り立つ滝川モデル情報活用スキルチェック表をカスタマイズして、一人ひとりがめざす情報活用スキルの方向性を明確にした。さらに、授業中に即時にグラフ化され、見ることができるよう google フォームをもとに、獲得した情報活用スキルのデータ化を取り入れ、身に付いた力を可視化した。

4. 研究の成果と今後の課題

本校では、「指導と評価の一体化」をめざし、日々の学習活動での評価の充実に向け取り組んでいる。その結果、指導者は、情報活用能力が育成される場面、発揮される場面をきちんと把握し、「ほめる」「評価する」ことができ、情報活用能力の育成につながっている。

児童自身も、授業の中で「情報活用スキルチェック表」が明示されていることで、自分が獲得した情報活用能力を明確に把握することにつながっている。

教科の目標と情報活用能力の目標が異なる場合にも、学習内容に応じて情報活用能力の目標をしっかりと示すことが大切である。

指導者と児童が共通の「ものさし」をもって学習を進めることは、情報活用能力を獲得するために欠かせないことであると考ええる。